

1. <ディズニーの夢づくり>(100404 毎日)

パーク全体が「一つの舞台」

「その壮大な仕掛けは、ゲストが JR 舞浜駅に降り立つところから始まる。ホームでディズニーソングを耳にする。改札を抜け屋外のデッキに出ると、シンボルのシンデレラ城の先端が視界に飛び込む。二つのパークにいったん入れば、今度は外界が建物や盛り土、樹木で巧みに隠される」

「計算を尽くした空間の配置や演出。夢を支える技術の一つが「景観デザイン」だ」

「シンデレラ城にも仕掛けがある。高さ 51 ｍだが、近くで見上げると、はるかに高く感じる。低層は大きく、高層は小さく・・・と、比率を微妙に変え、遠近法を駆使して迫力を増しているのだ」

「遠くで景色、近くでは細部を感じさせるのが、発想の原点です」

2. <ずーっと愛して ロングセラー物語> (100404 毎日)

「キャラメルグリコ発売から、今年 2 月で丸 88 年を迎えた。小箱に入ったおもちゃは、「おまけ」の通称で親しまれ、世代それぞれの思い出の品になっている。・・・これまで 2 万数千種類、約 50 億個が世に送り出されてきた・・・」

「1919(大正 8)年、佐賀市。江崎グリコの創業者、江崎利一は漁師の作業風景に目をとめた。カキを干し身にするため、釜でゆでて、煮汁は捨てていた。江崎の頭に、いつか読んだ記事がよみがえった。「グリコーゲンはカキに多く含まれる」。グリコーゲンは動物のエネルギー代謝に重要な物資だ。煮汁をもらい、煮詰めた上で大学病院に分析を依頼すると、約 40%も含まれていた。グリコの原点だ」

「ライバル社との違いを出すため、箱の色を赤にし、両手を上げてゴールインする男性をトレードマークにした。ところが女性客から「顔が怖い」との反応があった。6 年後の 2 代目の表情は、にこやかなものに変えた」

「「おもちゃ作りは、子どもたちの生活を観察することから始めます」・・・公園やスーパーなどで子どもを観察したり、自分の幼年時代を思い出しながら、何を提供すればいいのかを考え抜く。・・・「デジタル機器で遊ぶ世代でも、遊びを楽しもうとする子ども心は変わらない」

3. <外国人観光客向け有償ガイド 通訳案内士資格 見直し議論波紋>(100402 産経)

「通訳案内士は昭和 24 年設立の国家資格で、英語など 10 カ国語に約 1 万 3500 人が登録」

「「民間外交官」とも呼ばれる。通訳案内士法で、報酬を得て外国人を観光案内できるのは通訳案内士だけと規定され、無資格者が行えば 50 万円の罰金が科される」

「政府は現在年間約 835 万人の訪日外国人数を今後 10 年で 2000 万人に増やす計画で、平成 16 年の 61 万人から 20 年に 100 万人へと急増した中国からの訪日客が牽引役として期待されている」

「「需給にミスマッチがある」として観光庁は昨年、有識者による検討会を設置」

「現役の案内士が問題視するのが、無資格ガイドの横行だ」

「全日本通訳案内士連盟の〇〇副理事は「中国語圏の添乗員には、提携する土産物店に客を連れて行くことで法外な収入を得たり、歴史ある建物を何でも『寺』と誤って案内する

など苦情が絶えない。……と主張する」

「通訳案内士：活動範囲は全国エリアと都道府県エリアの 2 種類があり、観光庁の試験に合格すれば、住所地の都道府県に登録。通常は旅行会社などの依頼を受けて活動する。全国エリアの試験は外国語（合格基準点 70 点）と日本地理、日本歴史、一般常識（同 60 点）、面接。平成 21 年度は 8078 人が受験し 1225 人が合格（合格率 15.2%）した」

4. <電子書籍が変える読書>（100404 日経）

「グーテンベルクの印刷革命以来の大転換が、いよいよ始まろうとしている。500 年ぶりに出版文化、読書文化が大きく変わろうとしている」

「『Kindルの衝撃』（毎日新聞社）」の「「まえがき」にあるエピソードがショッキングだ。著者が知人宅を訪ねたときのこと。典型的な中流、リベラル、インテリである彼女の室内に、本や新聞が見あたらない。「最近、本を読んでいないの？」と聞くと、にっこり笑ってKindルを指差したというのである」

「『クラウド時代とくール革命』（角川 one テーマ 21）」で、「出版文化だけでなく、情報産業全体、あるいは文化全般も電子化によって激変すると予言する」

「本の「大転換」「大革命」が始まるかもしれない。だが慌ててはいけない。本は変化するかもしれないが、それは本の消滅を意味しない。グーテンベルク以前も本はあった。古代メソポタミアの人々が粘土板に楔形の文字を記録したのは 5000 年も昔のこと。地球上のさまざまな場所で、さまざまな方法で、本は書かれてきた」

「本が亡びることはない。粘土板が紙の束になったように形は変わるかもしれないが、本はなくなることはない。人間が何かを知りたいと思ひ、何かを伝え残したいと思ひ限り、本はなくなることはない。もし本がなくなるとしたら、それは人間が好奇心を失うときであり、人間でなくなるときだ」

5. <国連本部で初の落語公演>（100327 毎日）

「上方落語家、桂小春団治が、国連で初の落語公演を開催。大阪弁と 4 カ国語の字幕を含めた、5 カ国語での上演だ。出身国や文化、言葉も違う国連関係者ら約 200 人の国境を超えた笑い声に、落語の可能性を感じた」

「会議室のテーブルマイクそのままの会場は、普段の落語会とはちょっと違った趣」

「高座の後ろの白壁に映し出される英語、フランス語、中国語、スペイン語の 4 カ国語の字幕は、インターナショナル感たっぷり」

「演じるのはいずれも古典落語の「お玉牛(たまうし)」と「皿屋敷」。上方独特の「ハメモノ」といわれる三味線や太鼓による BGM 演奏が入る」

「日本語で聴いている観客と、字幕の観客との間で笑いのずれがないのも大きな驚きだ」

「一人が何役も演じて、全部せりふを覚えているなんて信じられない！5 人も 6 人も人間を瞬時に演じ分けるのが素晴らしい」

「10 年前に字幕による海外公演をスタートした小春団治は、これまで 10 カ国以上、10 カ国語以上で公演を続けてきた」

「「言語や文化が違う人が混在している中で、同じように笑ってくださった。…いろんな国の人が笑い合っている限り、平和であるという『落語で平和』のメッセージ」

「在留邦人向け、字幕方式、英語落語など、海外でもさまざまな形で活躍する落語家は少なくない。「KARAOKE」のように「RAKUGO」が国際語になる日も、そう遠くないに違いない」